



火の要らぬ炬燵を見る

なにがし

讀者は既に前々號の誌上で火なしかまどと云ふものが亞米利加で利用されて居ると云ふことを御承知でせうが我輩も彼の記事を見て一方ならず興味を起して一つ實驗して見たいと思つて居る所です。否讀者の中には既に實驗に取りかゝつて居られる方があるかも知れぬ、其實驗の結果は何んものだらうか一つ伺ひたいものである。聞く所に依れば近藤耕造氏は彼記事を紹介して後、自ら簡便なる装置を工夫して今盛に實驗して居られるそうだとすして、其結果は何れ本誌上に於て讀者に披露せらるゝそうだから其時は完全なる本邦的の火なしかまどの構造と其利用の方法とが明になり、

従つて本邦の臺所には薪炭の上に一大革命が起るだらうと思ふ、併し是は名こそ火なしかまどであるが或物を此かまどで煮様と云ふには兎も角最初一度は衰立てなければならぬ事は彼の記事に見えた通りである。所が今又是にも増して重寶な發熱器だと云ふのが出來たには驚かねばなるまい。今茲に紹介し様と思ふ火なし炬燵が即ち其れである。是は炭や薪などは始めから少しも遣はず或藥品を以て化學作用に依りて自然に熱を起させ様と云ふのであるから是が成功した日には日本の炭屋や薪屋は到底商賣變をしなければならぬ譯である。又其時こそは我國の家庭に一大革命が來ることであらう殊に我々貧乏書生には此上もない有り難い福音であると云はなければならぬ。然らば其火なし炬燵と云ふのは如何なるものであるかと云ふに記者の實見したものは湯たんぽ形に出來た(鐵又トタン等の金屬製)器に引き出しがあつて之を抽き出して見ると中には多くの鐵屑と或藥品(何う

も食鹽が主成分らしい）が入つて居て盛んに一種の瓦斯體を發散しつゝあつた（此瓦斯が一吋いやな臭がする）それで試みに其器に手を觸れて見ると丁度湯たんぼの入れ立て位に盛んに發達して居つた發賣人の云ふ所に依ると此普通なのが華氏百二十度の發熱力を持つて居ると云つて居た。華氏の百二十度と云へば之を攝氏に換算するとざつと五十度ばかりであるから成程湯たんぼや炬燵代りにして老人や子供の保護器には持て來いと云ふ譯だ。併し慾ばりな寒がりには五十度では少し足りないかも知れぬ。けれども工夫したらばまだく熱度が高まりさうなものだと思ふ。發賣人の云ふ懷爐用のものは發熱百八十度に達すると云つて居る。是を攝氏に換算すると八十餘度であるから是れならば炬燵や湯たんぼ代りとしては申分のない温度で、時には少し熱過ぎるかも知れぬ。と思ふ。發明人も工夫して此方をも普通のものに用ゐる様にしたらば一層よからうと思ふ。がまだ夫れ

迄には運んで居ないのは遺憾である。夫れから次に此器の長所と云ふ可きは其發熱が二ヶ月以上四ヶ月位迄も繼續することである。即ち毎日一度づゝ少許の水を入れてかき廻はして置けば其藥分の盡きる迄數月の長い間常に發熱して居る譯である。是が吾々の様な不省者と貧乏人とは此上もない一大福音ではないか。此點に於て我輩は殊に此種の發明を歡迎する譯だ。何うか多々益此種の發明が出て來て希くは湯わかし飯炊き、乃至は室内の暖房に迄も火を焚かないで自然に獨り手に出来る様なものがほしいものだと思ふ。誰れか發明して呉れまいか（何？請ふ隗より始めよつて！是れは驚いたナニ然らば今考案中だと逃げて置かうかアハ、ハ、ハ）笑談は借て置いて兎に角此火なし炬燵は專賣特許丈の價値はある様だ唯前陳の様に發熱の度が僕等の様な欲ばりには少し足りないが併し普通のもでも敷温、足温、鏝等には充分であり其高熱の方ならば懷爐の様な小さな者に少し入れて

も充分暖を探るに足ることである。

其使用法 是れが一寸慣れものらしい。使用書に依ると器の中へ鐵屑と其藥とを混合して入れたら之に少許の水を入れて豆腐から位のしめりけにし攪拌しるとあるが此豆腐のからは江戸の豆腐がらではいかぬそうだ。元が大阪で發明された器丈に其濕り氣も矢張大坂の豆腐から位にしめらせなければいけないとは妙な話ではないか。何にせよ東京の豆腐がらは大坂のそれより少し濕り氣が多いををだから其積りで少し乾きめにすればよいことをであるとして。蒲團の中に入れて置くと四時間から十時間の中には必ず發熱するそうだ（是れが少し待ち遠ふしいね）そこで此際一度火箸で全體をよく攪き廻はして又水を少し入れて置く事始の如くすれば夫れでよいのだと云ふことだ。それから一定の時に殊によく發熱させ様と思ふたら夫より二時間程前によく攪まはして水を加へて置けばよいをだ。

以上は東京に於ける火なし炬燵販賣店員（日本橋區青物町三〇）の話す所と記者の實見した所を摘記したのであるが一體此器の發明者は何處の如何なる人であるかと云ふに本人は大坂市東郡北新町三の五宇那原美喜三と云つて幼少の時から機械類を弄る事が好きで中學三年修業後同市の高等工業學校の機械科に入つて三年間も熱心に研究して居つたが事情あつて卒業するに至らないで退學してしまつた。所が天から與へられた發明工夫の力は是れ位の事で頓挫しないで其後引き續いてアセチリン應用の瓦斯ランプ、灌漑用の水揚機械輕便木挽機械等有名な機械を發明して世を益して居つたが近頃は又汽罐製造の事に熱中して其分銅を造る爲めに或藥物を持つて鐵屑をかため様としたらば不思議にも其鐵屑が化學作用を起して非常な發熱をした。それから思ひ付いて色々工夫し實驗した結果が遂に此專賣特許となつたものであると云ふことである。即ち專賣特許權は其藥品にあるの

で現今は大阪市北新町二丁目に住して製造販賣して居る由であるが。價格は炬燵一圓より一圓四十錢足温一圓二十錢より一圓七十錢、藥劑は一貫目三十錢位で二度に遣へるををだ(一度は二ヶ月乃至四月間有効)尙發明人の云ふ所に依ると此藥劑八貫目を三時間用ゆると一石五斗の水を華氏百二十度に暖めることが出来ると云ふことだから學校でも家庭でも之を水槽やばけつ手桶などの底に引き出しを作りでもして應用したらば至極妙ではないかと思ふ。要するに一寸買つて来て直ぐ役に立つて成程至極結構と云ふ譯には行かない様だが應用の仕方次第で可なりに使へる様である。



ホーヘンリンデンの會戰 (翻譯)

簞

日はリンデンの野に落  
 イーゼル川の黒き瀬は  
 戦鼓夜半にひやく時  
 静かなりけるリンデンの  
 合圖につれてつはものは  
 馬はいくさをいそぎつゝ  
 雷霆山を震動し  
 雷霆ますゝ急にして  
 血はリンデンの野を染む  
 流れも早きイーゼルの  
 戦雲空をおほひつゝ  
 フランク人とフン人は  
 進めますらをもろ共に  
 ミューニヒ人よ勇ましく  
 戦すぎてものゝふの  
 雪はかばねの衣かも

積雪未だ血に染ます  
 冬の空にも通ふらん  
 砲火闇をば照す時  
 姿はもとのものならず  
 共に刃を抜きはなち  
 聲勇しく嘶きぬ  
 軍馬陣地に突入す  
 紅火しきりに閃きぬ  
 戦 今やたけなはに  
 川浪いよゝ黒みゆく  
 朝日の影も力なく  
 烟の中に切りむすぶ  
 死ぬべき時は今なるぞ  
 敵の陣地をいざや突け  
 生きて還るはなかりけり  
 芝生とははの墓場かも